





知上		日朝	
△多賀祭 △盛田祭 四六丁	△八瀬祭 四六丁	△筑摩祭 △ちん祭 四五丁	△稲荷祭 △いなり祭 四五丁
△平野祭 四六丁	△久世祭 △山科祭 四六丁	△山崎日使 四五丁	△大神祭 四六丁
		△貴船神事 四五丁	△孟夏節 △扇拜 四五丁
		△女衣服 四五丁	△更衣 △福 △夏衣 △知花衣 四五丁
		△立夏節 四五丁	△小満中 四五丁
<p><b>四月部目録</b> △印ハ俳諧の季と指り  <small>養生の法。風雨の如く。米の豊凶。妙茶其外人家重法のていへる。あるゆへ目録ハハハハハ</small></p> <p><b>四月</b> 卦 月支 調子 四五丁  <small>陰陽生 異名</small></p> <p><b>日令</b> 此部ハ四月日の定りたることとて記す  <small>女の定りたることを記す</small></p>			

詩歌連狂  
 季寄註解  
 改正月令  
 博物筌  
 夏之部





甲上	上	日七	日八	日九	子中	辰中	申中
△當六祭 六丁	△當宗祭 六丁	△大津祭 六丁	△擬階奏 七丁	△灌佛 七丁	△山崎天王祭 七丁	△戒壇堂開帳 七丁	△地主祭 八丁
△夷本祭 六丁	△梅宮祭 六丁	△水屋能 六丁	△廣瀬祭 七丁	△竜田祭 七丁	△大峯上山 七丁	△神衣祭 八丁	△夏入 八丁
						△千園子祭 八丁	△向日明神祭 九丁
						△御蔭祭 九丁	△日向賀茂詣 九丁
							△菅宮祭 九丁

酉中	東照宮御祭	和哥祭
△岩神祭 六丁	△高野花供 七丁	△夏駒牽 七丁
△賀茂祭 六丁	△中山祭 七丁	△菅笠檐 七丁
△御形日 七丁		△さか祭 七丁
△葵祭 七丁		
△坂本山王祭 七丁		

月令	神祭	榊取	茶誥	矢教
此部は四月ヶ月日の定まらざる祭候	△神祭 七丁	△榊取 七丁	△茶誥 七丁	△矢教 七丁
	△奇刺 七丁	△三枝祭 七丁	△煮酒 七丁	△松前渡 七丁

時令 此部は四月の時候



△首夏 十<sub>三</sub> △清和天 十<sub>三</sub>

△夕花朽 十<sub>三</sub> △新暖 十<sub>三</sub>

△短夜 十<sub>三</sub> ○長日 十<sub>三</sub>

○時衣 十<sub>三</sub> △卯の花衣 十<sub>三</sub>

草木

此部より四月一ヶ月のころ  
木のさかえとあそびをいふ

△餘花 十<sub>三</sub> △桐の花 十<sub>三</sub>

△檀の花 十<sub>三</sub> △枳花 十<sub>三</sub>

△実柑花 十<sub>三</sub> △棋子花 十<sub>三</sub>

△乳柑花 十<sub>三</sub> △橙花 十<sub>三</sub>

△柚花 十<sub>三</sub> △金柑花 十<sub>三</sub>

△玄洲橘花 十<sub>三</sub> △佛手柑花 十<sub>三</sub>

△橘 十<sub>三</sub> △厚朴花 十<sub>三</sub>

△秦椒花 十<sub>三</sub> △梭桐花 十<sub>三</sub>

△柳花 十<sub>三</sub> △榎花 十<sub>三</sub>

○槐花 十<sub>三</sub> △外花 十<sub>三</sub>

△藪椿 十<sub>三</sub> △牡丹 十<sub>三</sub>

△名取中 十<sub>三</sub> △白牡丹 十<sub>三</sub>

△紅牡丹 十<sub>三</sub> △芍薬 十<sub>三</sub>

△杜若 十<sub>三</sub> △知母花 十<sub>三</sub>

△一八花 十<sub>三</sub> △王孫花 十<sub>三</sub>

△覆盆子 十<sub>三</sub> △純 十<sub>三</sub>

△芥子花 十<sub>三</sub> ○阿片 十<sub>三</sub>

△躍草 十<sub>三</sub> △白丁花 十<sub>三</sub>

○風露草 十<sub>三</sub> ○梅蕙草 十<sub>三</sub>

○王不留行 十<sub>三</sub> △羊蹄花 十<sub>三</sub>

○車前草 十<sub>三</sub> △文字草 十<sub>三</sub>

△天光中花 十<sub>三</sub> △山昔花 十<sub>三</sub>

△風車花 十<sub>三</sub> △繡毬花 十<sub>三</sub>



△岩梨	△石藤	△寶鐸花	△鴨足中花	△夏枯艸	△茨花	△千日紅	△青木花	△要花	△盧陀草	△新樹	△若葉	△木草茂	△木下齋	△葉楊	△若楓	△栢若葉	△常盤木落葉	△新茶	△刀豆花	△葵中	△紫蘭花	△茶挽巾	△玉卷芭蕉	△連浮葉	△根都古巾	△猪殃々	
四甲	四甲	四甲	四甲	四甲	四甲	四甲	四甲	四甲	四甲	四甲	四甲	四甲	四甲	四甲	四甲	四甲	四甲	四甲	四甲	四甲	四甲	四甲	四甲	四甲	四甲	四甲	四甲

△梅葉	△麥秋	△麥秋風	△青麥	△麥刈	△麥莖菜苗	△蓮のたる	△竹の子	△篠筍	△椛実	△綿蒔	△美人州
四甲	四甲	四甲	四甲	四甲	四甲	四甲	四甲	四甲	四甲	四甲	四甲

生類

此部より四月一ヶ月の  
いそめのとあゆむ

△郭公  
△子規△不如歸△まきの田長  
△初農鳥△とき鳥

△待郭公  
△初聞郭公

△郭公一  
△夜郭公

△雨中郭公  
△名所郭公

△諫鼓鳥  
△布敷  
△鼓  
△鼓

△老鶯  
△乳鶯  
△鶯付子

△鷹鳩入  
△飛蟻



△蝙蝠 四辛 △蚯蚓出 四辛

△蜘蛛の子 四辛 △蚕眉 四辛

△枝蛙 四辛 △鹿袋角 四辛

△蟬の子 四辛 △初鯉 四辛

△生節 四辛 △鯉子 四辛

**必用** 此部より雨風の占の破單

の向方○日よりけり一節○他行の心

得○作事の吉凶○料理執事念

物のより一節等其外もあつたり

○日の定まりくる事ハ口の日令の

部より此部より日の定まり

る四月一ヶ月の事とあつたり

四月目錄終

月令博物考夏之部發端

九月内書夏の夏の  
 氣の時を所する  
 礼記月令曰其  
 帝炎帝其神  
 祝融其日立  
 夏盛徳火  
 在の陰氣  
 在の極の陽  
 氣の極の陽  
 熱の時氣  
 多りすと注釈下詳なり

夏東 漢書律歷志曰夏則火  
 王其精天在溫暖乃

氣百木を養ひ生じたり又夏  
 假きり物假く大して宜平とら

○和語より訓とるハあきとら轉  
 音の下略やうとあり音通じらぬ

○方ハ南よりハ後漢書天文志曰日南  
 陸を行と夏とつと見えたり

○夏ハ日月東南の赤道を行くを  
 南陸といふ易統通四不出り



○精を朱雀と南方火を主とす  
よみ其禽は朱雀といふ

○人の禮との周礼の注疏は曰踐て身  
行ふと履といふ履は礼をう人の事  
を得るより礼法身備へて見事なり  
てあるなりといふ○天を昊天といふ爾雅

は曰夏と昊天とを孔安國の云元  
氣廣大なるをより陽氣と云ふは

して草木生くるをより○卦の  
離と人を取て和順なるをより

離と附と訓を別きくをより○卦  
より又は心を生て親を寄る心

とを○氣の陽といふ管子は曰其時  
を夏と云其氣を陽といふ図の上

に詳なり○臟の心といふ人身の心乃  
臟と陽と主として火に屬し

夏は配當を故に火截といふ○色  
は赤といふ説文は曰南方の色を易

疏は大赤は其盛なりと云陽乃  
色をうると云○味の苦といふ書洪

範は炎上苦を作ると云苦味  
火に屬するなり

**夏異名**  
○朱明 ○朱夏 ○炎夏  
○炎赫 ○光明 ○長夏  
○昊天 ○南陸 ○炎帝 ○祝融  
○仲呂 ○丙丁 ○執衡 ○南  
○暑節 ○正陽 ○假宣 ○長養  
○氣陽 ○炎霽 ○奇峯 ○南爲

**和**  
○ひげふ 雲御抄かそそひく 同上  
○名 神中抄はもふの註は夏の  
一名なりといふ

**夏異名註**  
○朱明といふ陽色なり  
くして明らなるなり

○朱夏 ○炎夏 ○炎節 ○光明  
つるも朱明といふは同ト ○長夏  
といふ物なりいふ長なるなり  
仲呂といふ陽散トく外なり陰

實して中なり旅陽功なりと  
少ふ仲呂といふ ○丙丁といふ禮記に  
其日丙丁丙は炳なり萬物皆炳  
然と云著見く強大なり ○執



衡と南方の神炎帝離ふ乘り  
衡を執り夏と司るなり。南  
訛と訛ハ化なり南方陽氣に  
いふいふ万物生く

○正陽と陽氣たし時節と  
いふ事あり。假宜と假大と  
いふ事あり。物長大のびるく。長  
養と万物生長とる月とる云

○氣陽と陽氣此月充満とる  
なり。炎霸と陽氣なり。火  
すめりなり。奇峯と夏の山  
に雲の出るなり。又夏の雲のけ

し山の形は似るゆへなり。南為  
と南方の陽氣を以て物のさる  
ゆへ事なり。炎帝。祝融。昊天  
の事も註。夏の由来の所なり。

はやちん 夏の朝。秘蔵抄ニ  
いふはてあての向きの物なり。さる  
○右の外三夏ふりる物の別ふ部有

### 四月之部

△此印あり能  
借の季と持りの云

此月純陽の月  
あまの精氣と  
保養して  
發泄とるべ  
卦の乾为天  
といふ乾陽  
のつとれた卦之故  
天の位とる之はしこの卦也

### 異名

△首夏△孟夏△初夏△新夏  
△早夏△立夏△之月△余月

○槐夏。清和。△麥秋。六陽  
純陽。正陽之月。△仲呂。△卯月  
△鴉鵲の月。△花殘月。△夏初月  
○こけいさうり月。△うのさふ月

### 異名註

△首夏△孟夏△初夏のい  
づれもは夏の夏と云夏之

○新夏いあぐり夏と云と。早  
夏いふは夏と云と。立夏の四月の



節の名とつう。乏月の月い乏と  
 とい意え。余月の陽ある月と  
 いえ。提夏あんど花さく故  
 ありく。清和の陽をさやうく  
 △麥秋いひび月々。六陽  
 と二陽とて四月と六陽とす  
 陽の純い事人陽さかんると云。正  
 陽之月正り陽の至極ある月と  
 とい意え。仲呂仲ハ中ニ呂ハ助  
 陽散と外より陰中ハ在て成陽の  
 功と助と。外月外の花月と置  
 蔵玉 多き月の月

夏の花さくはくるれく心の  
 下よやまこ入るる月の月

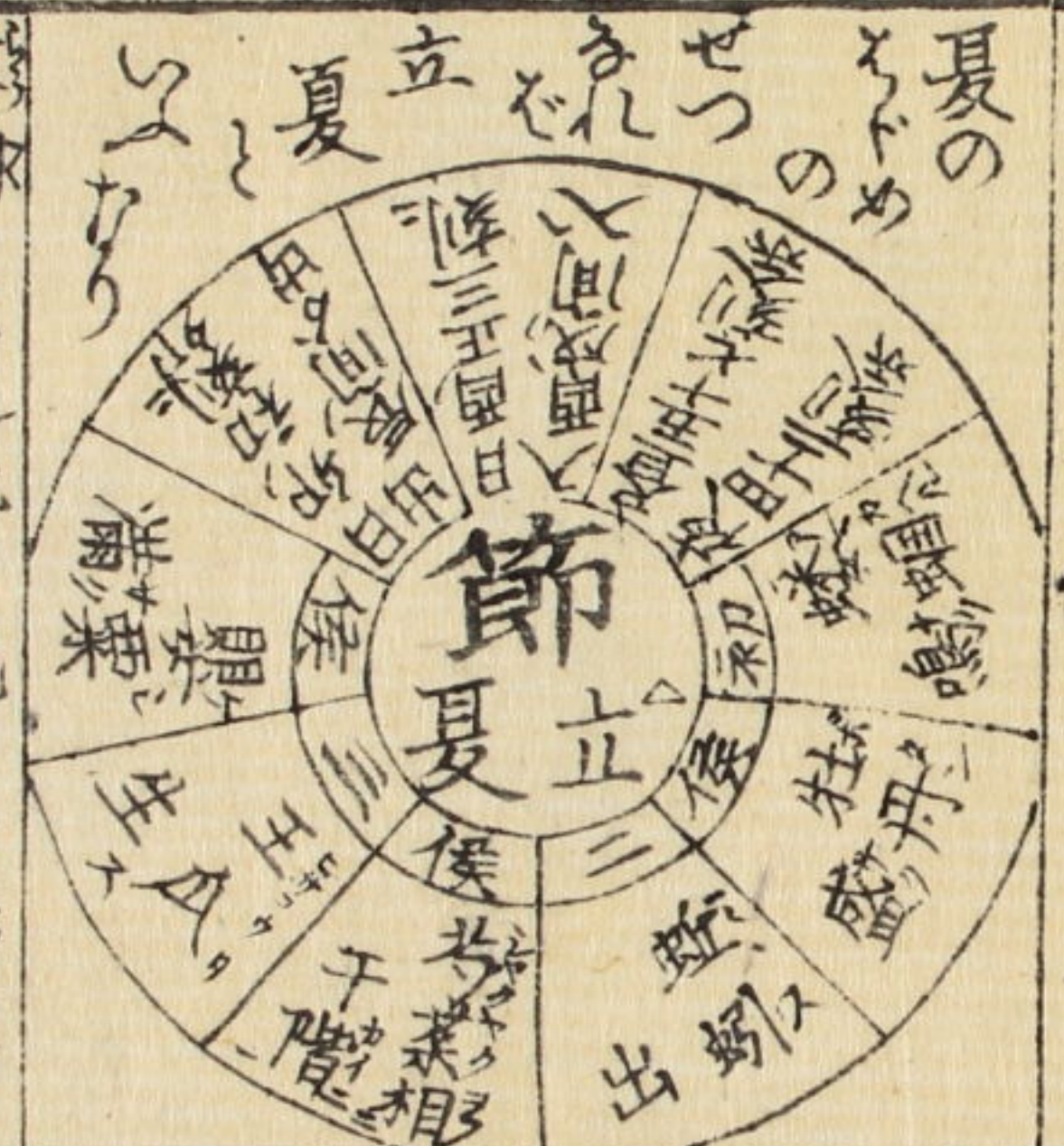
莫傳 うれ花月

夏月のつらじられまみん  
 うのる月と何とてとぬ

△ 夏初月

附るをういさるる月の月  
 夏初月のふれわりのいさる

節。七十二候。艸木七十二候の日出  
 入。昼夜長短委く左ふさす

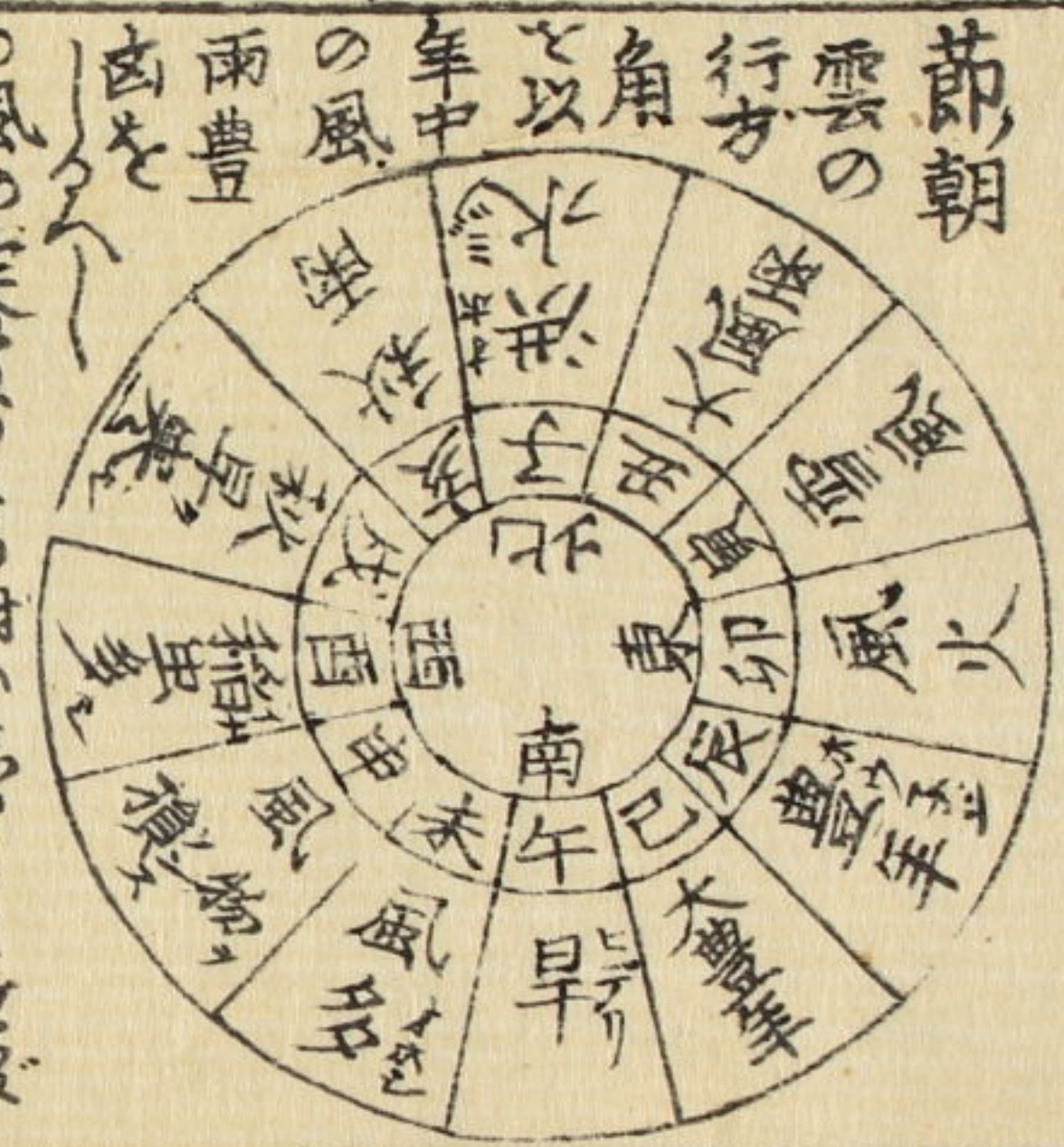


蟻螂ハ蛙之此月地ニ六陽生  
 て陽氣上ニ升て陰氣下ニ  
 降す蛙ハ陰氣を食ハ鳴く。蛇  
 蟻ハ秋ニさるハ夜ニさく陰虫  
 陽を迎へて地上より出る熱乃  
 来る。牡丹。王瓜ハさるり  
 ○牡丹。芍薬。嬰粟。此分る  
 花さく頃あるハ此月の候とす

節 天氣占候 今日  
 の日 日輪ふ

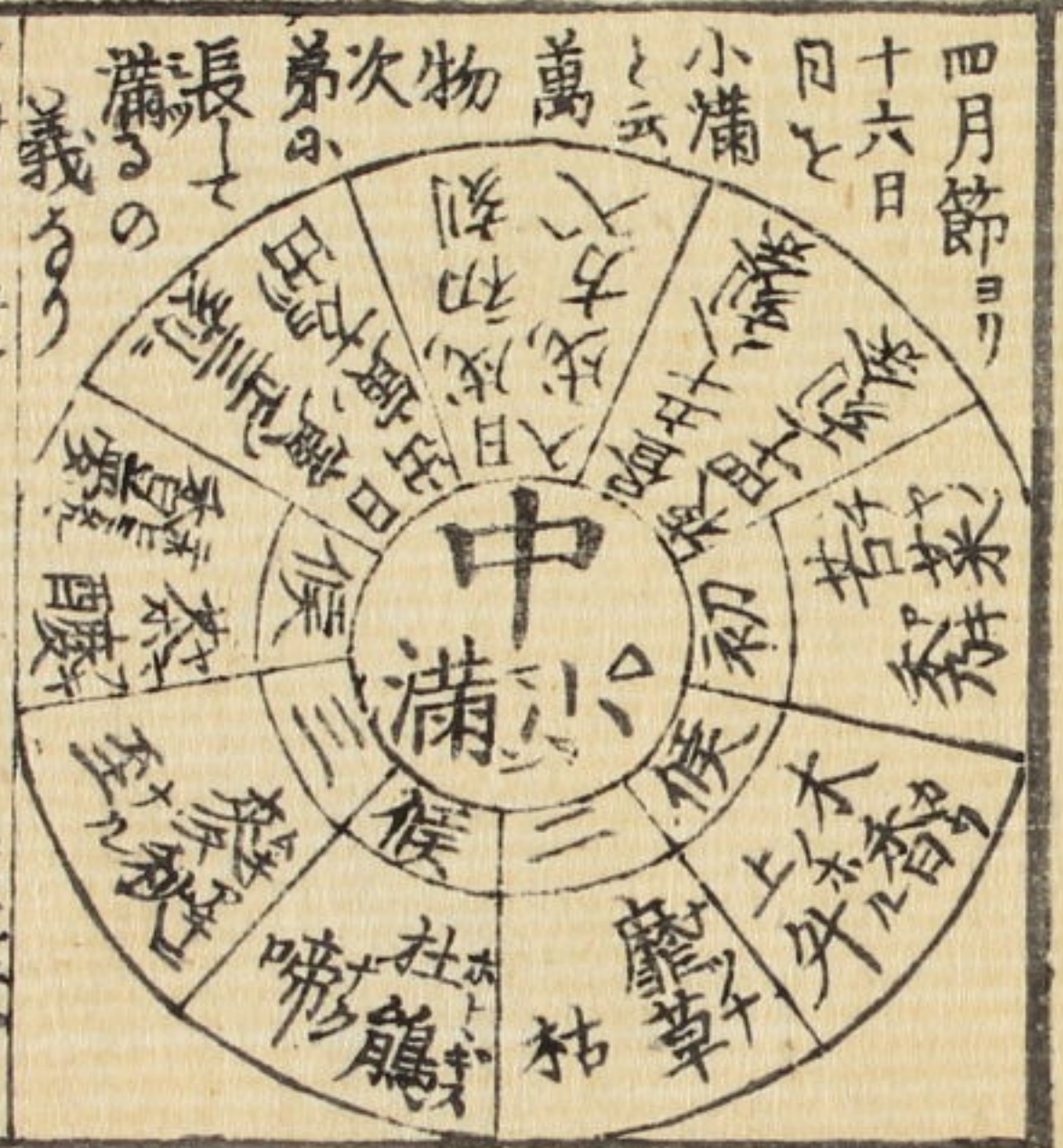


暈あまの洪水あり晴まの早り  
○雨降まの五穀ふよる○今夜  
月を九参星東のあまの山田半  
収南のあまの早北のあまの大風  
人病心○雲の大き車或ひの笠  
はよく見ゆらあまの時よま  
陽水の氣より暑お至て水の湯  
まぶ○東風のあま疫病の難は



○風の定まらうる時あまのせだ  
定りて一方へく風こころまぶ

中 ○七十二候の艸木七十二候。昼夜  
長短。日出等倭く左記を



四月節ヨリ  
十六日  
小満  
萬物  
次  
張  
義  
苦菜の茶の事之以頃茶と  
つと取之。靡草なるもの類冬  
水より生じ草の惣名は夏の  
火氣よあまのあまのぞ○秋の  
豆その外物の收る時あまの  
此月かり納るを秋しつとぞ

○木香上外。杜鵑啼。茶酸  
香夢此皆小満の頃さた或啼く

天氣 小満の日と麥生日と  
天ふまの麥大いふ熟と

日令 四月日の定りたる事支  
の定りたる事とあま



朔 天氣 今日朝日の出る所 東に雲多く西晴

たりの月中天氣は日小暈あり 西に大風吹

けバ米價貴し 西北の風吹

秋の水とくふし晴は早し

今日雨多し 豊年二日小雨

ふまば水多し 三日の雨は早し

更衣 △裕 △綿 △外の花衣 △白襲 又白重 △橘衣 △赤衣

○更衣の時の服襲裏表共白 綾或は平絹白をかき 禁中

の御装束 今日より改む 御帳の かにびらとじふき 胡粉を 繪とかしきふき 着服を

かゆり故更衣といふ 今日より綿 入とかりてありせぬさうべし

### 女衣服

衣裳の色は定む 八月申頃迄

平帯といふの前そいといひ たるよえ 昔は民家にて今日より

足袋とともさしとあり 禁中 院方の女觸は四季とりふめを

新古今 前大僧正慈圓 ちりもてて花の葉をた

夫木 俊成 交をた衣してふり

同 田舎更衣 仲正 ちりもてて花の葉をた

論 衣衣花深まふ社かたり

ぬきうあり 卯のとき 一夜の花

衣のひきふあり 給縁接



連 山ひらのそむきさうや夏衣宗祇  
非いて之を裁くは布衣さうの蟬衣 芭蕉

大沼まをたて物さきこ裕る其角  
初後とくは扇ぬぐ大工部移竹

惟もくみ中つりせの若初部立圃  
たはりのもかるまうつる衣十摩

長持小まかきさひさるもく西鶴  
一日てたふくさき裕う那 思貫

衣う新巾一つ出来ぬり之道  
狂ぬまそまふもくもくもくや

花どろろの穂衣乃そて入安  
夏衣のくくも後とぬるくハ

魚の腹もや外おさるん自徳  
おまざん 音葉簾も云今日より

吉日簾 殿は新に御簾さか  
おまざん 音葉簾も云今日より

續拾遺 土御門院  
ひまをさといそ知せんかとされ

くふさうりかろあありとも  
非は後ほろろはまき後嵐雪

福かたて内七旅さきま度虚白

主水司始供水 四月朔日  
天子へ水と奉るなり 延喜式に出す

孟夏旬 夏季の改る始小臣  
天子へ水と奉るなり 延喜式に出す

御酒とたび扇と頒ら 給ふゆへ  
△扇拜も云今い絶す 公事根元

年中行事哥合 殿中將  
詠人のけりある神ふかきあり

風爐の茶 三月廿日 風爐の茶  
朝日より 風爐の茶

京 貴船 近江 筑摩祭△鍋祭  
神事 云此里の女

嫁入を鍋をかづりて神事小出再い  
とまるとい二枚より幾度ととも

しつる数程鍋をさき茶を 或は初  
非格よりて福をかきさるる馬貢

二京 調子村祭 山崎の近所へ  
日 圓明寺小倉大明神祭 能



三天氣

今日天氣晴も夏  
中風雨頃めて五

穀豊年也たまによつて  
米と商ふ輩四三と唱ふ

禁忌 此日一切の血を  
見ると凶いむ 京 山崎日使  
山崎離

宮の社人行列を八幡(参) 俗に長者  
形に八幡  
○宇治黄檗開山隱元禪師忌

近江 山王神御出夜半頃大津四  
の宮へ御出是山王のおまじ

祭の日神幸のまじ大津より  
大宮の拜殿かへへ入る奉る

上京 稲荷祭此月外三ツの  
中の外れ日へ弘法大師

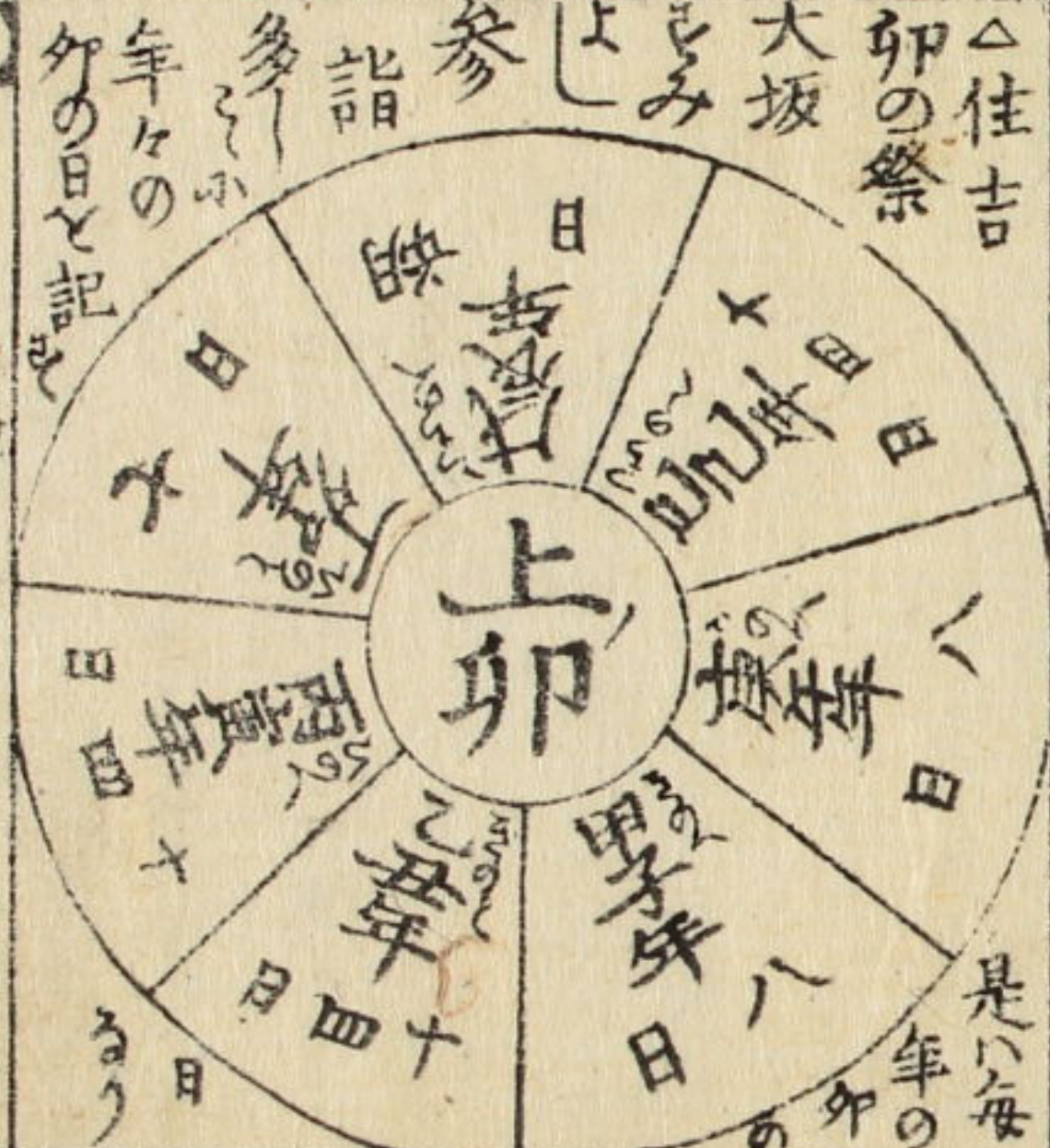
東寺造営の時稲と荷いする  
翁現しふ神之初午の所(姿)

さうたうだ 是稲荷山の鎮座  
の時大師其面容を自らまじみ

給ひて神事の最初祭とあう  
神奠はわける面としくり

大和 大神祭 大神といふ三輪の神より  
祭主の神の御とく  
◎年中行事 宗信法眼

我々の法代でさく人形りふも  
おぼの神のまじりせけ



上京 △八瀬祭 辰三ツあはれ  
中の辰日行りあり

上京 △山科祭 北山茂登岐明神  
祭△久世祭 三ツ己あはれ中

近江 △多賀祭△堅田祭  
○三井寺 早尾祭

上京 北山イカダ  
明神祭



四月田令

上京 平野祭 貞觀神  
申日 年中行事奇合 二位將

柵より月来りし人の  
手押の表ふゆりし

大和 富麻 河内 近江 祭

上京 松尾祭 貞觀年中  
年中行事奇合 貞世

梅宮祭 橘氏の祖神あり  
年中行事奇合 秀長

梅のまゐるふつる由

河内 近江 祭

不成 天氣 今日雨降  
日就日 五穀貴し

南都 天王寺講堂  
大坂 結夏 音祭

水屋能。四日五  
日あり 地人能く

大和 廣瀬祭 竜田祭 右両社同日  
祭あり 天忌風神の祭と云

天武四年風神とタツタツ祭り大忌  
神と日野小まんと日本紀不出し  
風水の難とのぞけ豊年といふ神

五京 神足 六江 目黒祐天寺千  
部修行十五日と

七 擬階奏 是日二月又列見とて六  
位以下の藝能ある者

を撰て式部兵部の二省より  
ひさしそまの松上卿升達を

札記し置き今日持てまの  
そ大臣うも取て奏聞せしむ

大坂 住吉小八 今日強さあま茶  
嘗會 日とゆひ出る

天氣 未の刻大風とまき昼雨ふり  
豊年之夜の雨の直り

禁忌 遠行旅立とる悪  
○草木と切打といひ

灌佛 佛生會 浴佛 佛の湯  
龍花會 唐も寺にて五香水と  
以て佛にゆゑす



△花山堂△五香水△つじい奉ル  
○五才六歩の釈迦の像と造り金乃  
鉢の内へ金一聚僧法と修す是世尊  
生息多山人時天竜産湯と奉一象こ

⑤年中行司 咲地お月のふんとかきん  
まいるる久きき法のとあふと  
⑥麦飯と母たをて併生と其角  
せつんの虫のやめ法 左の哥とまのの註  
かきさけむのせいといとら

⑦ 山崎天王祭○大原  
大嘗會○天王寺講堂佛生會午刻音衆  
○同所太子堂結夏開闢午下

山城 比叡山花摘 ○戒壇堂  
開帳○水無瀬祭○かいで

光立寺 南都 興福寺佛生會  
開帳 伶人舞樂○奇樂會と云  
今けは長くいよき

大峯山 今日より始て上戸前  
しり九月八日まで

役行者この山の岩窟ふ金剛胎  
藏の法と修と千百年かある  
九日 清水寺十不成  
△地主祭日就日 天氣 晴天の  
世豊へ

十四日 天氣 晴天の豊年なり諺云  
今日黄昏時分と見よ  
日月對しててせハ秋旱なり  
東南風の豊年なり

伊勢 △神衣祭 麻積連麻うもて  
神明を奉るをいふなり

大和 △練供養中將姫の忌當麻寺  
ふて行ふ真言浄土兼学の寺へ  
十五日 夏入 佛家ふて一夏九旬と云  
て今日より七月十五日迄

禁足とると夏あかりつとつ入夏  
へ地は草繁茂一虫多く出来  
ふと踏殺さるふく是で安居  
と云らるく夏十九丁出らる

京 五山親佛一山の衆徒と集め  
禪師拂子と取て高座に登り



偈を<sup>レ</sup>念<sup>ル</sup>諸<sup>ノ</sup>禪<sup>ノ</sup>師<sup>ノ</sup>問<sup>ハ</sup>尋<sup>ハ</sup>ズ<sup>ル</sup>也<sup>ノ</sup>也<sup>ノ</sup>  
○東山新<sup>ノ</sup>熊<sup>ノ</sup>野<sup>ノ</sup>大<sup>ノ</sup>般若<sup>ノ</sup>轉<sup>ノ</sup>讀<sup>ノ</sup>修<sup>ノ</sup>行<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>

江戸 小松川<sup>ノ</sup>善<sup>ノ</sup>導<sup>ノ</sup>寺<sup>ノ</sup>中<sup>ノ</sup>將<sup>ノ</sup>姫<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>筆<sup>ノ</sup>  
阿<sup>ノ</sup>彌<sup>ノ</sup>陀<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>像<sup>ノ</sup>同<sup>ノ</sup>帳<sup>ノ</sup>

大坂 天王寺<sup>ノ</sup>塔<sup>ノ</sup>會<sup>ノ</sup>干<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>刻<sup>ノ</sup>行<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>  
昔<sup>ノ</sup>天<sup>ノ</sup>王<sup>ノ</sup>寺<sup>ノ</sup>七<sup>ノ</sup>村<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>鐘<sup>ノ</sup>と<sup>ノ</sup>出<sup>ノ</sup>

祭り<sup>ノ</sup>ゆ<sup>レ</sup>其<sup>ノ</sup>時<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>移<sup>ノ</sup>り<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>馬<sup>ノ</sup>具<sup>ノ</sup>  
面<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>形<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>村<sup>ノ</sup>々<sup>ノ</sup>社<sup>ノ</sup>内<sup>ノ</sup>か<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>ノ</sup>有<sup>ノ</sup>と<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>

天氣 雨<sup>ノ</sup>ふ<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>豊<sup>ノ</sup>年<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>暮<sup>ノ</sup>時<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>  
月<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>相<sup>ノ</sup>對<sup>ノ</sup>して<sup>レ</sup>照<sup>レ</sup>ら

せ<sup>レ</sup>秋<sup>ノ</sup>野<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>り<sup>ノ</sup>○月<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>ノ</sup>こ<sup>ノ</sup>早<sup>ノ</sup>  
く<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>雲<sup>ノ</sup>は<sup>レ</sup>紅<sup>ノ</sup>色<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>大<sup>ノ</sup>い

で<sup>レ</sup>り<sup>ノ</sup>ま<sup>レ</sup>り<sup>ノ</sup>又<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>ノ</sup>こ<sup>ノ</sup>に<sup>レ</sup>  
そ<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>白<sup>ノ</sup>き<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>雨<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>さ<sup>レ</sup>る<sup>ノ</sup>

十六 京 安<sup>ノ</sup>珍<sup>ノ</sup>寺<sup>ノ</sup>鬼<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>母<sup>ノ</sup>神<sup>ノ</sup>祭<sup>ノ</sup> 三<sup>ノ</sup>井<sup>ノ</sup>  
と<sup>レ</sup>同<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>今<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>修<sup>ノ</sup>行<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>

江戸 杉<sup>ノ</sup>妻<sup>ノ</sup>稲<sup>ノ</sup> 近<sup>ノ</sup>江<sup>ノ</sup> 三<sup>ノ</sup>井<sup>ノ</sup>寺<sup>ノ</sup>  
荷<sup>ノ</sup>祭<sup>ノ</sup>礼<sup>ノ</sup> 千<sup>ノ</sup>團<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>祭<sup>ノ</sup>

願<sup>ノ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>ノ</sup>者<sup>ノ</sup>た<sup>レ</sup>ん<sup>ノ</sup>ご<sup>ト</sup>千<sup>ノ</sup>々<sup>ノ</sup>ら<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>鬼<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>母<sup>ノ</sup>  
神<sup>ノ</sup>へ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>る<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>参<sup>ノ</sup>詣<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>り<sup>ノ</sup>い<sup>レ</sup>  
く<sup>レ</sup>る<sup>ノ</sup>ま<sup>レ</sup>り<sup>ノ</sup>千<sup>ノ</sup>々<sup>ノ</sup>ご<sup>ト</sup>い<sup>レ</sup>

中 子 京 △吉田 辰 京 △向日明 神祭

中 △近江八幡祭 蒲生郡八幡村在  
後世ニ至リ 移住杉山祭神石清水同

中 午 京 下賀茂 大坂 玉造稲 荷御出

近江 △菅宮祭 中 關白賀

茂詣 御車之地下殿上人前驅之  
あま遊び駿河舞など

の神事ありと公事根元分出り

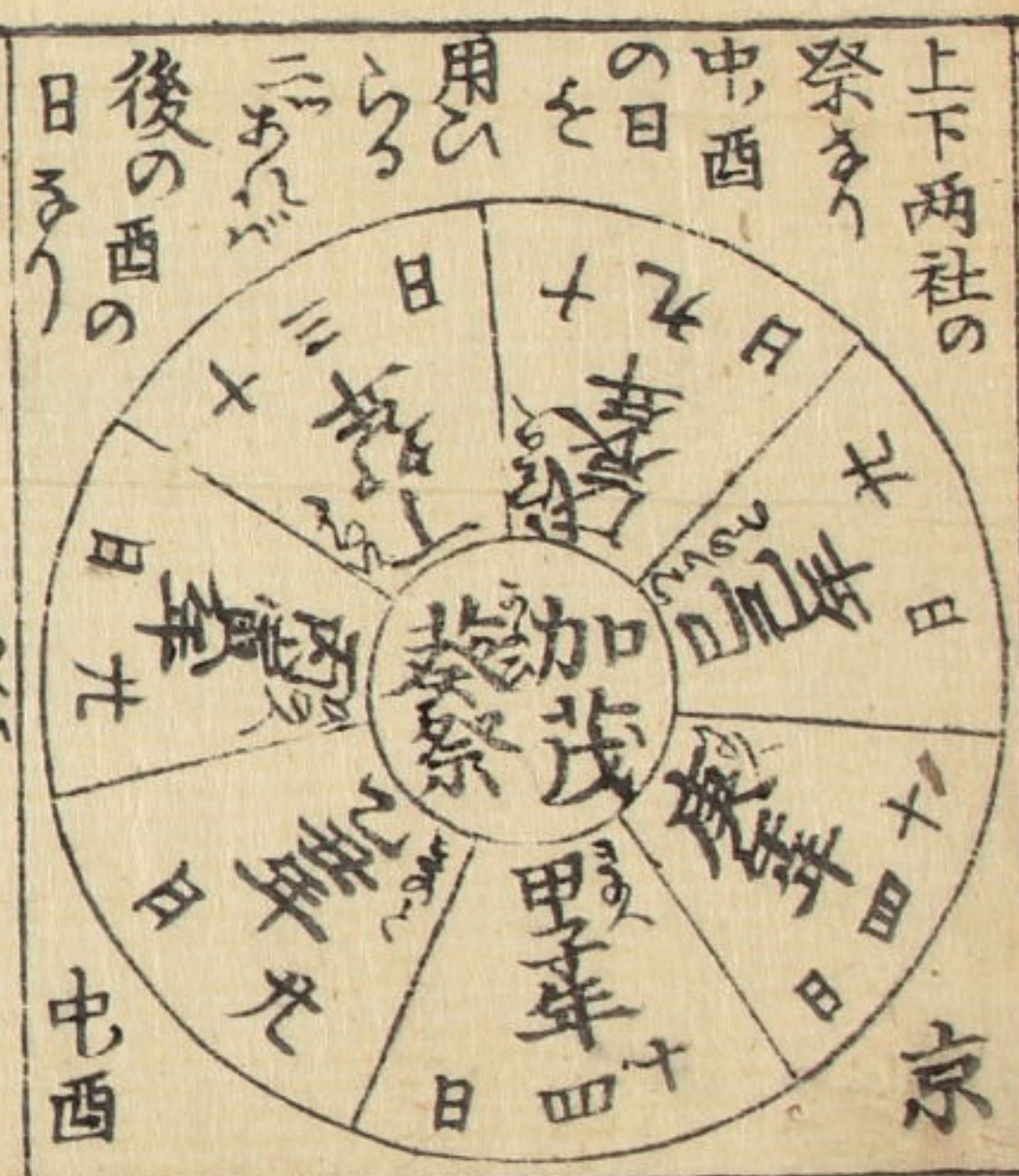
中 申 加茂△國祭。加茂社山城國の地望  
故今此祭の國の者祭るへ今絶た

申 近江 坂本山王祭 非 さいほやむ  
うさぎの取まらう風鈴軒

中 酉 加茂祭 上加茂のひらら乃  
御神の下加茂の神躰

御祖の神々△祭りとさう  
いへ此祭りよめらふをう





**葵祭** 今日人々葵のつとむるゆへに世俗葵祭といふ

**御形日** 御生とも存今日加茂の神生ともいふ日といふ

**葵桂** 諸鬘とも云葵と桂ととさす故諸鬘といふ葵

静原より取来り桂ハ松の尾より伐り来り諸のかぎりといふ

**菅笠擔** 大なるとび笠とさし荷ひしる行列あり

夫木 毛玉并よりたつは祭ありてはとせうけり加茂の川を後京極

年中行事哥合 頃阿

神心のおひを垂てたがせりこのころさうさかざりしけん

夫木 西行

心車は形のきあふりたのあふりといふよきしとをよみ

**詞** 神も嬉しく同色なる葵まふあまの川のありと社をすす

ふ丹やうの矢をひきてせしむる不の名をりて神は名をりて

ふよある。葵まつる。葵車。鏡車。物見。蓋。是れ神なり

**連** 加茂てり母は葵の二葉小宗牧我足を中より本ありて祭りか

去路 任かちまきくもかきれた神の祭りよみ字も葵といふかきて常無毒

中 土焼 京 是則愛

宍権現の祭祀あり祭る神二座伊弉並尊一座 火産



靈尊一座と云むいへ平安城鷹峯東又社ありいと光

仁天皇御宇天應元年紀の慶俊今の靈地より奉

ふるり神興い山下清涼寺より出つ土人の女屋臺ふて

舞い或ハ傘鉾を出し風流之中山祭時酒の冷泉院に

おする石神これより天喜元年四月よりより先その

官幣と奉らると云は是中西日るるべし

七十 大和 東大寺 戒使

東照宮御祭 日光山 其の外

諸国あり○紀州若山御祭殊ふ美麗△和歌祭△雑賀祭△

天氣 東南の風を真風とす大豊年とす

○南風い旱西北風い洪水東北風い水西南風い平きり

京 泉涌寺雲林院 如法経會 廿九日

高野花供 紀州高野山を弘法大師の像の所

衣をさへ是と花供といふ今高野金堂より學侶の僧薬師會と

修行し花を供むるの日と大師の御衣をかゆる日と同日なる也とそ

廿四日 伯耆 大山 天休節 〇 不成就日

晦日 夏駒牽 〇小の月をいへ 廿八日小行する

天皇武徳殿より出御あり庭上ふ御馬といさ渡り白馬の節

會のあり此の来月騎射の馬射人をいへる御覽せり

いへる負觀の頃よりはト免らる猶延喜式ふくは

北野御神事 音栢御供

○新日吉祭 昔ハ今日迄廿五日月



月令

此部ハ日ノ定キル所ニ依リテ  
月一ノ月ノ事ヲモテ

神祭

此月神事多ク一名  
をさぐれば李はる

齊刺

神祭せんと松竹柳  
をさぐり守事あり

金葉

春お月のよふにこぼ  
るる春お月のよふにこぼるる

神取

△神三は 是るも祭乃  
はりて江次舟委

三枝祭

辛川祭をいふとや  
三枝の花と酒樽ふり

茶誥

宇治よて今月挽茶壺  
へはめりる上品と鷹の

ざる故に神祇今夏祭の  
所載らるる(註)年中華書入眞大納言  
あふの光と枝の花と白雲  
神乃はまへは酒をさぐり  
茶誥 宇治よて今月挽茶壺  
へはめりる上品と鷹の

凡て銘極上と記を拾叟袋  
中て壺へはめると極上中中  
とさぐりてつりて茶をてつめ封  
まる又其決る茶の上と初むり中  
中む下と後むり銘と是はた  
袋中てつりて濃茶用さる  
ちつめりて決る茶の薄茶は用さ  
今月諸方へ出るとも茶事ハ風灯  
の時節より炒て重どるによりて  
此茶の口切ハとてつり方にて  
九月より後ふとるなり

○弘仁六年江州志賀にて崇福  
寺永忠僧都茶を煎して奉る  
やあはれも其時日本小茶は  
皆唐茶より建仁寺の梁西  
和尚宋へ入て茶のよと得た  
て明恵上人これと梅尾小裁  
よりあふはる日本小ひろま  
るりそれより梅尾と茶山  
と小裁所と深瀬と云て今



煮酒

京師是と酒煮くつて酒肆やといと

酒煮の祝ひといへる

矢數

△大矢數い云 洛東三十三間堂と此事

とみん弓の天下ととる矢を通とことむりより四月

中旬小極まけり日のあつたとりつてのゆへにうべし

松前渡

商人蝦夷松前渡る冬春ハ寒氣強ク

渡りかへ故此頃渡り秋上る能くして船の目も何處等水

時令

此部は四月の時侯よかる事とありむ

首夏

四月の異名あり四月を只夏の初と云意に

新古今 素性法師を免ともあぬ春もあつりので

いとぬきくる夏ごろもあ

建保百首

定家

大井川うりぬおせれそのまこなるさかたりと夜もあかり

新續古

首夏風

左大臣

吹風も程やいとらんたの春のうまをたたりし秋もあ

詞らつた。夏のを。氷はあし。漆をり。お奈はあ。こむろ乃。漆。まのひはえり。秋るた。ま奈はあ。

夏はあつた。卯月の始り。林と信。春の候。うは月。夏の本る。

非筆てしるも卯月のあかり。思貫ひくくとも奈やのひのあけ移行

狂言二月つのもな中へ異竹の夜敷とともあはさひたり。六谷

詩 首夏五字對句

清和未換衣風光夏葉初

セイワエダカヘコロモヲカヨクハセメ

ハホクヲカセアリ



幽僻還聞鳥 花落春鶯晚

詩 首夏七字對句 詩礎

西灣水綠堪銷日 列樹雲

南浦花紅好送春 艸綠春

詩 首夏之詞 明 郭嘉貞

巡簷燕子掠晴絲 隔水茶烟

出院遲 燕メノ片タト巻ブハ晴天

人不到 午風吹暖夢回時 夏草

盛リニハエシゲリ人ノ来ラサレ処

和清天 △梅天。〆〆〆〆四月

天の詩 孟夏清和天 園之冬々

源氏胡蝶まことて又清く

夫木 小大進

云とれて月とみほる夏の花

卯花朽 頃日の雨とつら

きり哥は三月ふも五月は

〇山里のみの花々守み

新暖 四月の頃日々ふわてふ

短夜 〇お非い夏は昔の古来長

長日 唐の文宗帝の作り

夏日長く殊小頃日未熱

時衣 若楓衣 小千草色

△卯花衣



聖麦衣あはれあひふく おろもあはれあひふく

草木

爰ふ四月一ヶ月乃  
くもと木とあつひ

餘花

青葉花 殘花。春ふ  
おろもて咲のる花く

新拾遺

内大臣

別てのはあべとやゆ、春の  
月影はたのさたゆらん

家集

山餘花

雅有

くらねるま成まるとふげ乃  
ま余いづひまのむり本

繞古今

殘花

俊頼

揺るふ花跡らぐいひらく  
死んていづまふあき

詞 枝ふすまをよほさ本がくま  
あ余はうるまは花見。風の静す  
あ静すまははなひらり。な入る山

桐花

白桐。黄桐。紫桐。荷  
桐。是皆桐の種類く

梧桐

桐ふ似て皮青く、疎皮子  
日月の関を知るべ都て

十二葉あり下よりかきて十二葉  
の中は小葉もま其月関也鳳凰  
乃栖此桐きり

云

寂蓮法師

百散や桐の指ふとむるの  
ふとせの年の色もかりじ

俳 聆ももて足やる桐花葉  
殿造り並ひてゆし桐の花其角

檀花

杜仲。思仙。木綿。時  
顯輔

若のひす岩くたまもて色もは  
そと嵐よあうせももあ

枳花

時珍曰葉の橙のま木  
櫛のじ白花といらを

詩

枳穀之詞

雍陶

澧水橋西小路斜

ホツイヨコ道  
川ツタヒニユク

日高猶未到君家

オタクへ行ツ  
カスニハツスギ



村園門巷多相似 ガレシヨノ同シ

處々春風枳殼花 キコクノサイ多所

蜜柑花 大和本草の其花をハナ

棋子花 花棋子とも云

乳柑花 久年母。花

柚花 樹葉皆橙

梅花 花白

佛手柑花 実熟して人の手

橘 包橘。盧橘。軒生

橘 草昔州庭古州

橘 とまよ花。橘ハ柑類の惣名也

かり世ふたらばると称する物の  
包橘なり 万葉 三方抄除

橘のあやむいむらのやま のこまそけいふいもふわいそて

新古今 通真

行末松花 あぐさてう風

同 家隆朝臣

今昔より花咲そひるまむの  
いと昔の香ふ白うす 家集 風静盧橘香 清輔

君代又松もるこそ吹風い  
とふまむの白ひり 夫木 閑居橘 光俊

夫木 閑居橘 光俊

同 夜盧橘 如願法師

同 里盧橘 隆祐

あひかりひりしとをさみらのの  
まのふりさるる白うす の



詞句ハハ笑ハハりハハ。さハハさハハのハハ月ハハ神ハハ

神ハハのハハ香ハハふハハじハハとハハ思ハハ入ハハひハハりハハ枝ハハ二ハハ

古里ハハ新ハハ燈ハハ。云ハハ月ハハ雨ハハ

連ハハ橋ハハふハハいハハくハハうハハらハハがハハ家ハハのハハ風ハハ宗ハハ林ハハ

俳ハハ者ハハ句ハハふハハらハハえハハ実ハハえハハ陸ハハはハハえハハ其ハハ角ハハ

狂ハハ陳ハハ皮ハハふハハあハハらハハぬハハりハハまハハのハハ

句ハハハハハをハハさハハくハハてハハぬハハれハハ茶ハハもハハるハハ自ハハ總ハハ

楓ハハ樹ハハ隱ハハ茅ハハ屋ハハ 白ハハ花ハハ如ハハ霞ハハ雪ハハ

橋ハハ林ハハ繫ハハ漁ハハ舟ハハ 朱ハハ實ハハ似ハハ懸ハハ金ハハ

銀ハハ章ハハ自ハハ謁ハハ人ハハ臣ハハ力ハハ 歲ハハ寒ハハ心ハハ

玉液誰知造化功 度玉岑	珠顆形容隨日長 處々紅	瓊漿氣味得天成 嘯橋林	厚朴花 葉擲の葉は似て鋸 齒は大方る物尺は及	秦椒花 山椒ともかく味は つく物多く干し食ふ	櫻欄花 花の初魚の孕い子 のびく是と櫻魚或	夫木 為家	能掃 のあひ日わ櫻欄の花唐
----------------	----------------	----------------	------------------------------	------------------------------	-----------------------------	----------	------------------



抜招の皮一年に二三度あつひ  
四度剥べし剥ぎればなつて

長せざるゆへ皮と剥ぐ葉は  
所より剥初る葉の付くる所

中に入れば葉がうさの柿花 正字  
とふ時ありし

○柿の七ツの妙ありて多壽ニ多  
陰ニ鳥の巢あり四ニ魚の

と五霜葉玩び六実あり七落  
葉ありして文字と唇べ右を

柿の七葉花能立家てゑのれも  
絶し云△榎花 中以異さ外幽齊

○夫木 川邊の岩の根をとて  
ちり人の家ぬるゝ 為家

槐花 今月花咲 卵の花 槍の花  
実は秋く

名異 白荊花。錦帯花。空疎楊柳櫃  
花。志は足草。雪見草。初見中

夏雪中。垣見中。卵の花とつひ  
つぎむふの中畧る△箱根つ

ぎ 十姉妹。花いく △岩本う  
つぎ△里う川ぎ

○新古今 白河院  
卵の花のひらくさむ垣をを

きるれ卵の殻とをえふ  
卵のむねをめり白く人乃

波りてゆる垣ひとそらる  
夫木 後京極攝政

里人のうのえまかる人かけみ  
かと若とのむりとと人

家集 水辺卵花 西行  
立田川のむすまををとを

おせいのまをまり卵のを  
家集 卵花似夕顔 匡房

家集 卵花似夕顔 匡房  
卵花見をいはるはとをの

夫木 卵花似月 為家  
久々の卵のけをとをと

嘉祿百首 河卵花 為家



之くみあつるの河乃卯花を  
月くけりぬりたるまのそ

五社百首 暮見卯花 俊成

去る月のうつろふの追風  
流しをまさらさけ卯の花

夫木 湊卯花 定家

かへる月のゆくふゆ風  
あはれそそむる岩に卯の花

夫木 舟路卯花 家隆

うねる舟のやまらたの舟人  
夜をわたるあひよよせてらん

明月 山卯花 教定

神ふれよつたむけと若く終  
うのむさけるゆへのこころ

夫木 社卯花 定家

あはれよつたあつるやう屋  
ゆのてまほくかふるうのそ

鳥羽殿哥合 田家卯花 俊成

小山田のあつるこころあけて  
あひまのまの花はあつるそ

夫木 卯花続家 寂蓮

卯花のかきひのまふまは  
いそめりりどめりりまふ

金葉 卯花連垣 匡房

つまをらふておまし山雲の  
垣根はくまは笑さうけふ

千載 遠村卯花 政平

うねるのそそめたり山雲の  
かきひりりあふれるあつる

後拾 山家卯花 通宗

後絶て来るこころは山雲の  
我のそそめたり卯の花

詞 笑ひたる白妙雪 若菜

名目 月山山雲のほひ  
の月山雲は雪あけふまふる

開 秋の乃野うらさ系 分ま

川さるる布はまふ山雲の波  
のまふるまふのまふるまふる

雨 卯の花をさうけふ時鳥卯  
花のほひかへる卯の花をさるる

木陰 木のるりりきえたる雪 森







暮香深若玉堂行 淺復深

群芬盡怯千般態 有此花

幾醉能銷一番紅 醉數杯

詩 牡丹之詞 唐 李太白

名花傾國兩相歡 常得君王

帶笑看 牡丹名甚傾國ノ

御氣ニ入ル故常ニ君王笑

秋春風無限恨 沉香亭北倚

闌干 此面品ニムカハドノヤウナ

詩 飲酒看牡丹 劉禹錫

今日花前飲 甘心醉數杯

酒宴ヲナスナリ 但愁花有

語不為老人開 蒼モノ云ハ

イヒ語ルヲアリトモ我等老人ノ

為ニハ口ハヒラクニジキトナリ

牡丹 錢思公カ説ニ白

花ハ其次ナリト云ヘリ今櫻ヲ

水ノ王トシ牡丹ヲ草ノ王トス

沉香亭 唐ノ明皇ノ牡丹

白牡丹 花潔白ニシテ愛

狂 低珠と侍らひはじ花さけ

詩 白牡丹之詞

長安豪富惜春殘 爭賞

新開紫牡丹 都ニモ春ノ名殘

子テ賞競スルゾ 別有玉盤

美露冷無人起 就月中看

丹ヲ白銀ノ盤ニ 見立テ作レリ



白牡丹

種類 三國。五重七重  
花びらあつくはやあり

○あし菊。五重大いん○白縮。六  
七重大いん○出雲。六七重中いん  
○香久山。三重大いん○袖の雪。大  
いん二重とこしうふあり

紅牡丹

種類 深井。大いん濃  
紅うらあざかき多

○筑前。中いん色濃七八重いろ  
蠟紙よべせやうるじ○志は  
凡大いん薄紅より紙よれきお  
とけなるじ○朝日山大いん  
五六重凡咲○見越。濃中いん八重  
○妙覚寺。大いん四五重○廣沢。大  
いん四五重○握々。大いん九重○  
待夜。中いん重より○山里。大  
紫菊さる○大紅。大いん黒紅よ  
ちしそんすより一尺まで○舌紅。  
中いん五六重紅色より○濱紅。  
大いん多し○小泉。色中紅さる

花さるそとれうそ  
きかろうありあり

芍薬

異名 將離。花相。犂  
食。餘客。和名△あひす

草。かよ州。秋根とてりて薬  
用ととるあり

非芍薬の四子や葉の味多 立圃  
芍薬は骨折えゆる味多 移竹

狂咲くや牡丹と百合のちく  
ねすあまぬ芍薬の花 常樂菴

詩 芍薬五字對句

幸因親切地 孤賞白日暮

還遇艷陽時 暄風動揺頻

詩 芍薬之詞 唐韓愈

浩態狂香昔未逢 紅燈燦々

緑盤龍 昔シヨリカ、ル色香ノ風  
流ヲ見ズ花ハ燈ノキラ、

カナル如ク葉ハ音竜ノワタカニ



似々 来獨對花情驚恐知  
在儂宮第幾重 ハハハ仙家ニテ  
毛幾重ス

芍藥名花 関守。血三重紅  
の中黄うん交

○小夜雨。血三重隨分白○金孔  
雀。血三重や紅○白砂金。白三四

重○たつき。薄紅二重花中うん  
白○錦木。血紅三重りく黄色金

杜若 燕子花かや花かつもと  
○本邦久しく誤り来り

杜若の香草あり此花の正字馬  
蘭本名の功実あり

○建久百首 定家  
おのゝ下衣ほろふ杜若  
ゆふもよけてあさるまゝ

拾玉 杜若写水 慈鎮  
杜若うげゆかふれとるゆるりか  
あといへるをそそぎまう

山家百首 水辺杜若 仲正

惟々山下あのかさ川く  
ひくさひ海乃色小嘆々

○哥の部立ふくたつく春小  
とあり連俳よ夏る詞派。

山家。極衣。く夜。さく。  
名所。侵若。八格。志賀。昆陽。

廣沢。池あり。世沢。花うくむ  
連。あどあより信。杜若。宗春

俳。兼まけあふ挽る杜若。其角  
夏の日や門控て行かあつ信徳

狂。あてさくふいのあやめつ林鳩  
似るや似るう雄長老

一そい信海法印

杜若名花 鷲尾。るう中  
又ん白羅生

門。う寸黒。○橋姫。うけさき  
○濡鷺。うさた薄雲。白



むくくくきり ○ハ橋濃ひさ  
き花首は葉一枚つゝ出る茎一本  
小三返つ、咲くのみ、肥さるハ花四  
五つとも咲一番花二番花といふ

知母花 青き花 一八の花 名異

紫羅草 鸞尾 和名は余罰と  
書つて花紫のて杜若に似たり

覆盆子 種類 ○蛇母 ○蓬藁  
○麩 ○樹母 △草 いら  
△さらふいら △はらいら △べ  
いら △きいら △て夏花さたもの

王孫花 異名長孫 芥子花  
△つら △海孫

○名米 囊花 ○罌粟花 ○象穀  
○御米 (俳) けーそくけとふ  
らふあとの漬新いくけ其角  
△色いこれあいかとけいれ花立圃  
けいヤ身ハ合とけい坊を宗且  
方竹とよるよるまけいれ花訥子

阿片 ○鴉片 ○阿芙蓉 ○阿片  
ハけいの花の津液を

て罌粟青苞とむとぶとさ  
午後大まな針とりのて其外  
の青皮とて裏面の硬皮と擲す  
あそこちうれ次の早朝津出ると作  
かそこそげ収て瓷器ふとて陰  
乾つて用ゆ名方一粒金丹は是  
を以て製とて尤

久海の妙薬なり 躍花 續断  
花葉

の月を生ぞ人笠を 白頂花  
名づく花白く小は 撥滴下は 植る

風露草花 花白梅 梅蕙 花  
花

玉不留行花 ○金盞銀臺花  
藤撫子に似たり

俗名 羊蹄花 ○和 車  
大黃

艸とて



前草花 異名牛遺。牛舌。車輪菜。花穂。

文字摺 ○絞摺草ともかく本名いさごもびらうま。

靈光草花 ○鷹爪。花黄。畧。緑豆に似る。実同。

山草花 白花。風車花。白花。紫。常。人。

繡毬花 白花集咲。てぬぬ。岩梨。三葉。

石藤 ○青つら。つら。花葉も紫藤に似る。紫白の二種あり。

夏枯草 葉。花の如く。花紫。

宝鐸花 花鈴。銀の。倒。垂る。青白色あり。

鴨足草 異名鏡面草。鹿耳草。花淡紅色。

茨花 △薔薇。△牛棘。△山棘。○牛勒。○実と營実と。

名つく野生の紅白二種あり。人家小栽る。花の形色数品あり。

千日紅 花の盛り久し。七百日紅。勝る。故名つく。

青木花 花紫。黯色。めて美。み。ば。葉常盤。

要花 ○扇骨木。○正字未詳。ら。才。小白花。を。ひ。く。其。

盧陀草 ○普婆三。草。○近世南蛮より來る。艸。

新樹 樹。植物の總名。新葉の薄翠を云。

新古今 曾根好忠。花。り。し。を。の。木。に。同。も。合。て。天。照。の。月。の。影。を。も。れ。る。所。

夫木 定家。



うけをたれあふのそくし日陰にて  
まじりてのり乃をすくすく

玉葉 庭樹結葉 院

そくして様みくふさりぬまの  
松のふもせもさうとさうらん

新續古 山新樹 左大臣

そくしてふあうせと香まふさう  
たつそるのふまらうと

詞さうう後。神さの夜。神

山の系。若楓。若葉。若葉。若

りぬ庭。あつこの若葉

### 若葉

新樹は同一諸木の  
葉の若やうなること

非二三差山目ふ余と若葉外移竹  
浴紙移さそ舟の若葉うか松雨

### わらう葉

病葉さうの若葉  
の内まれば赤く又

白くあつひの黄いろいもゆる  
とつふ遊近といふ夏にてけわと云

### 木草茂

草木の繁茂さう  
茂草蔚林とさう

### 木下闇

木下闇。万葉は木  
下とすむ木の茂る

万葉 木下闇のゆ小写あつて  
いつくかあつてわらうらん

### 葉櫻

連花の木と入れい  
あつてあふふらる宗祇

非さう様やちさ日けさう一  
文鯉 葉さうやち中ののさうり希因

### 若楓

楓の字九月の所小注す  
八入と称さうの若葉

紅色のて四月青葉ふらう其  
外冬紅色さうの今月青葉が

### 夫木

信実  
まうけて葉されをつく若楓  
さうあつてさうあつらん

### 連

連はさうも時あ村あ若楓宗因

### 柏若葉

赤柏の若葉の  
色あつてさうさう

### 常盤木落葉

冬葉の落ぬ木  
夏葉と落



新茶 新製し古茶 新茶  
對之云

刀豆花 色淡紅(能)慈花  
ふさ(豆)の心(の)羅州

葵 二葉草。葵うつ。日暮る  
折る桂と西の日加茂へ

遺を加茂ふて葵はよりそゆるを  
日ろつゝこひ日蔭草日蔭の

ろく 葵は日蔭は咲て日暮るを  
唐土めて荒葵といふものく山州加

茂の山中小生と二葉の葵あり  
面青く裏紫色と帯少るる

上よりどく桂の木枝母つけ  
て簾及器ふはるる北山中村

うり 秋るるの葵の種類五月の外は  
新茶 小侍

いふかしのそのく山のあふひき  
とていふれども二葉さるるん

詞が葵を葵。君は葵。長きその  
か。枝女。白は。鹿。車。おさ。は。作。の

あつ 月神の夜。曙。

非物怪くつひ葵の植連 慶安

狂ぬくつひ葵の上小豆をや

い息水のまゝさるるん 貞徳

葵五字對句

野酌勸芳酒 満園種葵藿

園蔬烹露葵 遠屋樹桑榆

詩 全七字對句

詩礎

山中習靜觀朝槿 奈蜀葵

松下清齋折露葵 祇綠多

紫蘭花 花蘭のじ  
紫又白れあり

兼ひろくたてどあり

詩 紫蘭五字對句

押軒竹氣淨 拂簾蕙風涼

キキカガキニルル カセハニムレララフク



茶挽草

雀麥穂あり。燕麥  
麥より味おもしろ

玉卷芭蕉

宗輿云新葉未開  
うり物卷葉といふ

○卷心葛。葉の芽出の巻ころえ  
能をぬ糸玉破玉(安)葛(安)来香

蓮浮葉

水面浮く生るる云  
○葉未ひくころと

卷葉

入月まきの巻葉のゆりころ  
○葉未ひくころと

詩 卷荷之詞 唐 韓偓  
侵曉衆涼偶獨来不因魚躍

見萍開 曉ノ涼氣ニサソツレ来  
テ池上ヲナガメルツ

卷荷忽被微風觸 鴻下清香露  
一杯 フヨク風ニ卷キ葉ノ蓮ノフ  
レテタマリシツエノバラク  
トヲチテ  
ニホフツ

根都古草 針のまゝ細き  
草之万葉より

猪殃殃 △葎花ともかく或々  
八重むらともソウ

梅葉 能葉にありて画  
其角

麥秋 秋とい百穀成熟の期  
あり今孟夏といふ

麥秋 於てハ則ち秋  
あり故又麥秋と云

家集 俊頼  
みそのよま麦の秋風うよをこて  
山やくまき志のひたくる

能 能る士能るをる麦母小 其角  
能化堂麦つく傍とゆき小 全

麦秋もこの時や紅紫稻 正安  
三々の云けかきる麦秋の夕

るいさふせりかりたり 如竹



何人もささげし人まはけく人も  
ぬぐしれをかりるるまうか 教二

青麥 ⑤ 青むらさきをちひさ  
きぬいよの圃 鬼光

麥刈 立春より百二十日と刈  
と旬と但小麦平日と違

麥藁笛 麥の莖とりのり笛  
と小児の戯るり

○西行奥州山下村一人の童子小童  
お僧は何国へ行玉人と問ふ西行哥  
枕をぬきをむるる行ふと然る  
うはめの方かまふ多必辱を得玉  
り冬生夏枯る艸を哥とむる僧も  
とあるやといふ西行神の事頭并  
かて夫より引いて洛へ帰るとこ  
この所も西行のまじり松とあり  
あるの樹今ふありこの草は麦  
之是塩竈の明神示現とといふ

詩 麥秋五字對句

川光淨麥隴 綠樹連村暗  
ムキタノヨモナガレ

日色明桑枝 黄花入麥明  
ヒツレヨクサキカミサウレニクハイツクニキキキ

似水流 麥ノ色トリワケ秀テウ  
ルハレホナミノナビクハ雲

波ニ似たり 風作跳波時隱見  
シテ浮況見

雨添新漲乍 沉浮 凡雨ノ波ヲナ  
タリ隠タリ 晴畦錦漾千層澌寒

隴濤生四月 秋 麥秋ノ豊饒  
ナルヲイフ

怪狂瀾頻起 陸漫教文偉 賦

中愁 起ハガコトシ

蓮花の 菡萏若根の順の和名抄  
小蓮の菡萏和名いぬ

哥を待りて 詠じりよみりかみ成成  
とを待りて 賤き身と塵塵



人の思ふ心多し蓮泥も生じぬ  
泥と戀よとてよ多し奥後抄  
和名抄等も泥とつくる字と  
こいちと訓とるなり

筍 たけのこ 笋 異名 竹萌の初筍  
△夫木 匡衡

親のこえむけ人のいふと  
竹の子れとあるいふなりし

非 笋の皆祖師るれや東坡の画季吟

竹は子い春の候るる青かふ久住

若傍の首とかむ後う那 其角

狂 笋を 新發とてあるは毎

世附は世をいあま竹の子供を保友

詩 筍之詞 唐李商隱

嫩 穠香苞 初出林於陵論

價重如金 タケノコノ出カケニハ

皇都陸海 應無數 忍剪凌

雲一寸心 都ニモ草山ニナカレベシ  
藟ヲシキモノナリ

採筍法 朝早く見て露の上ら  
どるのそねととるべし露上る

のい大竹ととる 竹根ひろくと  
止る法 隣よりとる人來り妨

ととる心 海帯と多く埋ち  
と此方へ生ととるなり

淡竹筍 四月 紫竹筍 味の淡  
盛出 竹の同

美人艸 唐項王の婦人虞氏自死に其墓上  
生とる艸有今人て美人艸と云く古文重集

○右の外説多し委しく八冊六丁出

類多し皆篠子と云ふ

篠のこ 篠の小竹ありて俗に

密と呼ぶなり

哥 拾遺 道昭

今い我々もき老の坂とて  
みよけりるもとの下ら



櫻實

生ハ青ク熟シテ赤黒  
妙薬トク魚の毒トクモ

非実梅や花ふいひはたろ温故  
実梅や花と通る人ろく是水

花のあふぬふいひの綿時  
たひや梅の実後之綿時

種植

大豆 黑豆 大豆  
小豆 胡蘆 薔

石菅蒲 秋牡丹 枇杷 秋海棠  
桂 楓 杜若 秋月入替又ハ針植

挿木

沉丁花 連翹 雁木  
芙蓉 木犀 柏 椿 等

収採

蜂蜜 稀莨 紅花 蚕豆  
桃仁 桑の実 麥

生類

此部より四月一ヶ月の  
生るの法ありし

郭公

異子規 杜鵑 杜宇 蜀魂  
望帝 不如歸 百舌鳥

玉迎鳥 田歌鳥 早苗鳥 妻戀鳥  
田長 まで田長 無常鳥 夕影

鳥 嫩背鳥 勸農鳥 くら 時鳥

貞應百首 遠郭公 為家  
惟里いそくちやひんあききす

常盤井百首 朝郭公 仲正  
やのめだこころそれさちうこ

夫木 社頭郭公 大宮大政大臣  
ふのそととあるはせろとやうに

夫木 人家時鳥 法印印宗  
ふのそととあるはせろとやうに

弘長百首 雲間子規 行家  
あつちのうへうへいのやうき

夫木 近圃郭公 俊成  
あつちのうへうへいのやうき

同 野郭公 定家  
あつちのうへうへいのやうき

あつちのうへうへいのやうき

あつちのうへうへいのやうき

あつちのうへうへいのやうき



文殊師利菩薩の法に下るるはくはくはく  
わきてやとらうらまはくはくはく

同 里子規 入道三品のこと  
まよふく作もまのまの里はなと  
まよふくまよふくまよふくまよふく

家集 山寺郭公 西行

時多まよふくまよふくまよふくまよふく  
まよふくまよふくまよふくまよふく

詞 和善和善。まよふくまよふくまよふく  
まよふくまよふくまよふくまよふく

いと声。妻のまよふくまよふくまよふく  
まよふくまよふくまよふくまよふく

声。まよふくまよふくまよふくまよふく  
まよふくまよふくまよふくまよふく

まよふくまよふくまよふくまよふく  
まよふくまよふくまよふくまよふく

夜の泊るまよふくまよふくまよふく  
まよふくまよふくまよふくまよふく

に鳴。圓家の戸を夜まよふくまよふく  
まよふくまよふくまよふくまよふく

まよふくまよふくまよふくまよふく  
まよふくまよふくまよふくまよふく

明の月まよふくまよふくまよふく  
まよふくまよふくまよふくまよふく

まよふくまよふくまよふくまよふく  
まよふくまよふくまよふくまよふく

まよふくまよふくまよふくまよふく  
まよふくまよふくまよふくまよふく

まよふくまよふくまよふくまよふく  
まよふくまよふくまよふくまよふく

まよふくまよふくまよふくまよふく  
まよふくまよふくまよふくまよふく

まよふくまよふくまよふくまよふく  
まよふくまよふくまよふくまよふく

まよふくまよふくまよふくまよふく  
まよふくまよふくまよふくまよふく

まよふくまよふくまよふくまよふく  
まよふくまよふくまよふくまよふく

まよふくまよふくまよふくまよふく  
まよふくまよふくまよふくまよふく

まよふくまよふくまよふくまよふく  
まよふくまよふくまよふくまよふく



むくも思ふ声。人少くは里とが  
うれどと向ふ声。人も思ふ。上は思ふ。

月あつききり月小多んあり 雨あまをこも  
あればあのお跡をまよふ。このより出  
かく八月あよさちうくみくみちのこりま

いかり 早苗一説はやくいさかしの  
そすむのちよてむゆねをくみくよて

までの面がこくはとくはみ苗のちや  
もかくやくいさかしの

田がことむむいひたり 鶯あまのこ  
くまへり考のうこの中よ

介くさすせりよりの 急あまのこ  
よつてあまをせりよりの

をわたりさかくぬさだまめさくさく  
まじさなりおののくね 教傷あまの

あまをせりよりの 急あまのこ  
あまをせりよりの

あまをせりよりの 急あまのこ  
あまをせりよりの

懐者回ひうり さかす。ひうりまのよ

連あまを 考のよはさくあま 宗因

あまよりかひはを都に全

非あまを 考のよはさくあま 宗因

あまよりかひはを都に全

あまよりかひはを都に全

あまよりかひはを都に全

一僕あまを 考のよはさくあま 宗因

待郭公大抵待仲 為家

あまよりかひはを都に全

あまよりかひはを都に全

あまよりかひはを都に全

あまよりかひはを都に全

あまよりかひはを都に全

あまよりかひはを都に全

あまよりかひはを都に全

あまよりかひはを都に全

あまよりかひはを都に全

あまよりかひはを都に全

あまよりかひはを都に全

あまよりかひはを都に全

あまよりかひはを都に全



郭公声

是覺つる心  
分 白川殿 軌忠

何ぞとて一夢のふりてみ  
空のつらふ遠ざかりき

連 一声の足音の跡 かくるは  
非 一夢や只是武の由き位 伊當

狂 中よまいぞ扇るまいとぞ  
宵こしく今の一と多 宗輔

夜郭公 月よせても  
◎ 続千載 高遠

まじらふまのつゞきやのほは郭公  
ニと夜ふくもなごころ

連 誰のゆのゆは夜は保とぞ  
月の中を文ゆる夜子のやとぎ子

非 煙味香とけけ小唄は松竹  
詩 夜郭公詞 顧况

野人自愛山中宿 况是葛洪丹

青西 オクヤニニラハコソハツ子ラキイ  
タニニテカウニウレヨクソ

庭前有箇長松樹 夜半子規

来上啼 コノタカイマツガニハニアルニ  
ヘニ夜ナカゴロノホトキス

ノコエラキクトナリ

雨中郭公 多く五月雨と  
りり或は淋き体

◎ 家集 雨中時鳥 顯季

五月雨ふいままのころけり  
ちとくにぬまてて

狂 ぬの夜やを舟のそとに郭公  
りて経るふあり一あり東陵

名所郭公 多く中 詞の所は出  
◎ 夫木 中務卿

あふ藤ふひのあはれは  
志のまよふ人ぬれをやあくらん

非 けのふれは何れかと思費  
狂 口如松とてあつて啼くや

かみの池水敷をうりて英中  
◎ 唐士の郭公のあくる多至つて

あまこころぬとあへ待て聞  
と欲等詩小作も其趣なり



詩 郭公五字對句

杜宇呼名語 渚蘋行客薦

巴江學字流 山木杜鵑愁

詩 同七字對句 詩礎

花外子規燕子月 山岫連

水邊精衛浙江潮 杜鵑啼

望鄉臺下秦人去 顧雲霄

學射山中杜鵑哀 子規啼

詩 子規啼 韋應物

高林滴露夏夜清 南山子規

啼一聲 夏茂露已、カナル晴

月ノユフベ子規ノ一コエ

オトツ 隣家孀婦抱子泣我獨

展轉何為情 時ニ感レ物ニ應レ

展轉ノ愁ヲ催

レ霜婦ノ小兒ヲ抱キナガラ泣

クガモノカナレク自身ニイフカレモ

ニタアハレナ

郭公 蜀ノ聖帝其臣下

ノ妻ニ淫レテ位

ヲ讓リ亡ヒ去ル時ニ此トリ

啼故ニ蜀人ホト、キスノ啼

ヲ聞テ望帝ヲ悲ム其鳴

ト不如歸ト云カゴトシ

諫鼓鳥 布穀郭公の雌

排つところ板屋の背の重塚越

葭原雀 割葦。芦又ハ葭原

雀ももつ 老鶯 △乱鶯。

雀ももつ 四月又ハ

故ニ老の名あり△乱鶯も同



鶯附子 トクシ音の鶯小字録の鶯と附て音と習字

鷹峙入 三才圖會曰鷹四月羽毛と易んとする時羣

縹ととら鳥屋の内は放ら新毛生ど七月中旬舊のどくく

○鷹三百首 冬をまつ八月やじの日

入七月十四日又出ととつ 定家

飛蟻 俗小

よりて蟻の羽を生して朽れる柱より出る

蝙蝠 伏翼。天鼠。仙鼠。飛鼠。夜

にも虫小も二句去て鳥虫の間

までも鼠に似て肉の類なり大

うら老鼠の化成るて古

寺院又い橋の下などふあり性椒を好む故に山椒を紙小包

て拋て其まじりて地は落る其所を捕へりてあやまりて手

の指は噛つけばまじりてその時急な山椒をあてふまじりて

新撰六帖 内大臣

日書れい新ふひりかひのあまその月も涼かりけり

夫木 和泉式部

人もさく多とふらん海までい

非 非

蜘蛛 名異

夫木 能因

さかしの糸よかりる白糸あり



あれいふ高の虫...  
 詞さや...  
 蜘蛛のあつち...  
 夜にうら...  
 さつら糸...  
 わさり糸...  
 弱糸...  
 とい風...

⑩ **非** 龍の子... 湖雲...  
 珠の果... 栗... 栗...

**狂** 風... 吹... 蜘蛛の網...  
 かな世界... 大... 常...

⑪ **詩** 蜘蛛之詞 唐 元稹

蜘蛛 天下 足 巴 蜀 就 中 多

世カイニ多キクモノ中ニモ  
 多キハレヨクノクニナリ 縫隙 容長

⑫ 踏虚空 織横羅 スコレンスキアカ

紫 經 傷 竹 栢 啗 噬 及 畏 蛾

木タケラメラリ... 為 送 佳 人 喜

珠 攏 魚 奈 何 スリ。ケツカウナル

カニヨリイルナリトツ

⑬ **蚕** 眉 蚕繭△蚕蛾 眉<sub>ウ</sub>子<sub>モ</sub>

後蛾△身△産是△翌年の種△

⑭ **非** 原△思△り眉△入△柳雪

枝 蛙 木の枝△居△て鳴△く故△  
 名△つ△く。雨△蛙△も△つ△

⑮ **非** 考△初△春△あ△飛△良 △鹿袋角

鹿茸。春落て四月ふ生る角袋

のぞく袋角と斗も季と持

⑯ **蟬** 子 椴掉子。蟹の属

⑰ **初** 鯉 鯉一名。松魚。肥満魚。

堅魚。至て早春... 春...  
 つる東都... 甚賞玩... 價... 貴...  
 ⑱ **非** 中△... 一目... 初... 松... 風光

鯉 釣 餌... 用... 牛の角...  
 或ハ鯉... 牙... 糸...



生節 鯉魚と四ふきだよく蒸し  
燻乾しと脯とをすらすら

其いさこ堅硬まろろりとのと  
世俗よんてままぢいとくろ

**必用**  
此部は四月要用の事  
又ハ天氣養生の法等と死

日刻 己の日己の刻事とまは  
ふ用やぐろす月建く

出行作事 西の方向いては  
今月天道西行整

破	夜九ツ	夜八ツ	夜七ツ
軍	未の方	申の方	酉の方
向	朝六ツ	朝五ツ	辰四ツ
方	戌の方	亥の方	子の方
辰	丑の方	寅の方	卯の方
暮	辰九ツ	辰八ツ	辰七ツ
辰	丑の方	寅の方	卯の方
辰	辰六ツ	辰五ツ	辰四ツ
辰	辰の方	辰の方	辰の方

樂事 清和の天と云霞も  
霧もほじて空の氣

色翠さうりの更衣かろふん地  
よ一〇木々の葉若やくまろの若

山吹も咲のさうさうの牡丹芍薬  
盛り富貴之〇郭公の初声。葵祭

天氣 曇りても北風強々い晴る  
西南の風ハ雨多る梅雨の前

西風統吹とまろろろ云昼夜く之此  
風よて北国廻船来と〇今月變有

米麦多〇庚辰辛巳ハ雨降ハ蝗  
降〇丙寅丁卯ハ雨降ハ米價貴

〇甲子庚申の日雷おれハ赤小虫つ  
〇今月雨多々れハ麦よわし夜ハ雨

多々れハ殊々 養生 立夏の後四十  
麦と撒す 五日北斗辰己ハ

建と此日乾ろ来ハ疾風暴雨ハ  
當る人ハ傷さし急ハ虚邪賊風

とろろ聖人これと矢石の如く避  
たやとろ委くハ内経見たり

四月用意之品 左よま  
ふん

海蘿子干 今月より  
よりりて



七月七日まで干はくつり  
季ハ夏とともふ

**徴不出法** 天氣よた時  
日ようりして

さうねさる箱よい紙よ  
てとらまふ張子おさて梅  
雨のうちこれとひくけんかび  
づる率さうれあー妙まう  
衣服をくもかくれどく  
とれがわび生まうこは

**草木と伐法** この月諸  
木とまは

蛙とむくまー○菖蒲  
の葉あきとて撰とてまの

ころまうさふなごー五月よ  
やうりて能葉いふふみ

**糊ふ虫はづる法** 櫛乃  
葉と

おわいぬあーてゆけい日数  
と経ても虫少ーも生ほど

**四月飲食并料理献立**

**料理**  
**汁** すき 塩鳥  
もせい ぶら ちんぽ  
**清**

**汁** さぎ たいの  
ごりう 子  
**鱈** あぢ  
あさうご  
いそ

たろふ たい  
ゆと 子  
ゆと 子  
ゆと 子

あゆ たい  
ゆと 子  
ゆと 子  
ゆと 子

**味** まる  
らげ  
**煮物** こい  
あせい

焼あゆ かくん  
竹の子 せん  
ゆと 子  
ゆと 子

切あゆ 竹の子  
ゆと 子  
**吸物** まら  
とすご

かいぞ 青  
かいぞ 青  
**和會**

**物** いろ  
青あ  
いろ  
いろ



精汁 丸いさ ますび 竹の子

進汁 丸いさ ますび 竹の子

膾 丸いさ ますび 竹の子

差味 丸いさ ますび 竹の子

煮物 丸いさ ますび 竹の子

和會物 丸いさ ますび 竹の子

時魚 丸いさ ますび 竹の子

鹽鳥賊 丸いさ ますび 竹の子

鳥 丸いさ ますび 竹の子

青物 丸いさ ますび 竹の子

酒味香 丸いさ ますび 竹の子

貯竹筒法 丸いさ ますび 竹の子

貯人と思 丸いさ ますび 竹の子

貯人と思 丸いさ ますび 竹の子

貯人と思 丸いさ ますび 竹の子

貯人と思 丸いさ ますび 竹の子

貯人と思 丸いさ ますび 竹の子

貯人と思 丸いさ ますび 竹の子

貯人と思 丸いさ ますび 竹の子

貯人と思 丸いさ ますび 竹の子

貯人と思 丸いさ ますび 竹の子

貯人と思 丸いさ ますび 竹の子



ほうきぬし井の中へけりさげ  
 水際をぬきぬ目よる水氣  
 の入らぬやうめて置べし五月  
 上旬地笥の終りを六月  
 中はけりぬ 同法 皮を去り  
 少し攪拌す さいき処を  
 切捨ニッヌ割と節の間ニ塩  
 を一をいへる桶をあぐべしよ  
 いく重ものさし蓋して  
 煮しとかちをくべし 又法  
 皮を去り熱湯にてゆびさる  
 けり締めをくべしを用时時  
 白水をまわして用  
 色白くしてよし

茹久たぐの貯法たぐ 李びと桶  
 小入蓋して

河の瀬早さ処に埋め石とお  
 そくたひさくをぬきのまそ  
 も盛してよく持つ





